

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 鈴木 智美



学位申請者 韓 金柱（カン キンチュウ）

論文名 現代日本語における「～がる」についての統語的および意味的な
観点からの考察
—第三者の感情に関わる種々の表現との比較において—

【審査結果】

本論文は、現代日本語における形容詞（形容動詞を含む）および希望を表す「～たい」表現に接尾辞「がる」が接続した「～がる」表現（以下、必要に応じ「～がる」と表記する）を対象とし、広くコーパスを用いて得られた実例をもとに統語的および意味的観点からの分析を行い、接尾辞「がる」と各形容詞との接続可能性を網羅的に明らかにするとともに、「～がる」表現の意味・用法を新たな視点から明確に整理し、これまで記述されてこなかったその使用される形態、および使用される際に特徴的に見られる統語的・意味的文脈について明らかにしたものである。従来「～がる」との比較対照分析という観点からは考察の行われていない、第三者の感情に言及する際に用いられる他の諸形式との比較も行い、「～がる」の全体像を明らかにすべく総合的・網羅的な考察を行った意欲的な論文である。日本語および日本語教育研究において見過ごされがちな小項目とも言える表現に焦点を当て、このように終始一貫した問題意識のもとに徹底的かつ明晰な分析・考察を行った研究はこれまでになく、本研究は、日本語研究および日本語教育研究の両者に意義ある貢献をなすものであると言える。

審査委員会では、論文審査および最終試験の結果に基づき、全員一致で学位申請者に対して、博士（学術）の学位を授与するのが適切であるという結論に達した。

なお、審査委員会は、鈴木智美を主査とし、学外から白川博之氏（日本語文法論・日本語教育、広島大学教授）、杉村泰氏（日本語文法論・日本語教育、名古屋大学准教授）の二氏、学内の早津恵美子教授、川村大准教授の二氏を副査とする5名で構成された。

【論文の概要】

本論文は、大きく第一部と第二部から成る。まず「はじめに」の部分で研究の目的・問題の所在・研究の方法・論文の構成についてまとめて述べられた後、第一部では「～がる」表現について各観点からの考察を行い、第二部ではその結果に基づき、「～がる」と、第三者の感情について言及する際に用いられる他の諸表現との比較を行っている。最後に「おわりに」で論文のまとめが行われる。

第一部の第1章では、先行研究の検討と解決すべき問題点の明示的整理、第2章では接尾辞「がる」と各形容詞との接続可能性の検討が行われ、第3章で「～がる」表現の意味・用法について、話者の心的なとらえ方に着目するという新たな視点からの分析を行い、同時に「～がる」が用いられる際の特徴的な意味的文脈について考察されている。第4章では、「～がる」が実際にどのような形態的变化を伴って用いられるのかを押さえた上で、前章で見た意味的文脈との関連を視野に入れつつ、「～がる」が用いられる際に特徴的に観察される統語的な文脈を実例に基づき抽出している。

第二部では、第一部の考察結果に基づき、まず第5章で、感情形容詞と意味的・形態的に対応する動詞と「～がる」との比較、第6章では感情形容詞（以下「A」と表記）に「そうだ」が接続した「Aそうだ」との比較、第7章では同じく「Aようだ」「Aらしい」との比較を行っている。最後に第8章でこれまでの日本語教育における「～がる」表現導入の際の問題点に触れ、導入の際に留意すべき点を本研究での考察結果を生かし、提示している。

各章の内容は以下の通りである。

第1章〔先行研究の記述の検討〕では、「～がる」表現に関わる日本語学および日本語教育関連の先行研究を詳細に検討し、解決すべく残されている問題点を明示的に整理している。指摘されている問題点は大きく2点である。1つは、感情・感覚形容詞および属性形容詞も含め、各形容詞と接尾辞「がる」との接続可能性を網羅的に明らかにし、「がる」が接続可能な形容詞全体にどのような共通の特徴が見られるのかを明らかにする必要があること、もう1つは、第一人称が主語となる場合、および対象となる人物の外面の態度・言動と内面の感情との間に食い違いが見られる場合など、「～がる」においてこれまで周辺的と考えられてきた用法を含め、「～がる」の意味・用法を十分に統一的にとらえることのできる記述が必要であるという点である。また、「～がる」が用いられる際の統語的・意味的な文脈はこれまで十分に検討されていないことや、第三者の感情について言及する際に用いられる他の表現との違いについても明示的に記述されていないという点があわせて指摘される。

第2章〔形容詞と「がる」との接続〕では、上記で指摘された問題点を解決すべく、まずどの形容詞に「がる」が接続可能なのかが網羅的に検討される。検討の対象となる形容詞は、形容詞研究における基本的文献である『形容詞の意味・用法の記述的研究』、および現代日本語の形容詞を網羅的に扱った『現代形容詞用法辞典』に記載されている形容詞あわせて全1,263語である。検討を行うにあたって、まず「感情形容詞」「感覚形容詞」「属性形容詞」等と呼ばれる形容詞の分類について、先行研究の分類指標を詳細に検討した上で、8つのグループ（①感情形容詞、②属性的感情形容詞、③感情・感覚形容詞、④属性的感情・感覚形容詞、⑤感覚形容詞、⑥属性的感覚形容詞、⑦属性形容詞、⑧その他の形容詞）が示される。そして各グループの形容詞について「がる」との接続が可能かどうかを検討され、属性形容詞 1,071語の中にも「がる」と接続可能なものが48語見られることが指摘される。本研究ではこれらの属性形容詞に着目することにより、「がる」が接続可能な形容詞には、感情・感覚形

容詞および属性形容詞のいずれについても、人が対象となる事物に接した際に生じる感情・感覚を表すことができるという共通の特徴が観察されることを実証的に見出している。

第3章【接尾辞「がる」の意味・用法】では、同じく第1章で指摘された問題点を解決すべく、「～がる」の意味・用法について、話者の心的なとらえ方に着目するという新たな視点からの分析が行われている。分析の際に用いられているのは、各種コーパスから得られた約6,300例の実例である。ここでは、接尾辞「がる」は、話者が、対象の外的な様子を総合的な知識（人がある感情・感覚を抱いている際に見せる表情や態度、行動に関する一般的な知識、および対象についての背景的知識）に基づき、対象の内面と関係づけてとらえ表すものであると位置付け、「対象となる人物が、当該の形容詞で表される感情・感覚を内面に持っているかどうか」および「対象となる人物が示している外的な様子と、その人物の内面とが一致するかどうか」という2つの観点から、従来「～がる」の周縁的・例外的用法として扱われてきた対象の外面と内面とが一致しない用法も含め、「～がる」の意味・用法が3つに整理されて示される。また、その分析結果に基づき、「～がる」が一人称で用いられる場合についても統一的なとらえ方が可能となることを示し、さらに「～がる」が実際に用いられる際の特徴的な意味的文脈について、対象となるものに通常とは異なる外的な様子が示されている場合であるとの一般化を示し、その下位分類を実例に基づき提示している。

第4章【「～がる」の統語的な特徴】では、まず「～がる」表現自体がどのような形の変化を伴って用いることが可能なのかについて確認し、「がる」が命令形や意志形で用いられる例は見られない一方で、受動表現、使役表現、また例は少ないながらも可能表現では用いられるという観察結果が示されている。さらに「～がる」が用いられる際の統語的な文脈の特徴について、実例を観察することにより、付帯状況を示す表現および引用表現を伴うことが多く見られるという結果を示している。さらに第3章で見た「～がる」が用いられる際の意味的な文脈とも関連し、対象となるものが、なぜ、どのような状況において、いかに通常とは異なる外的な様子を示しているのか、その原因、条件や程度・頻度、通常の場合との対比等を示す表現が共起する例が多く観察されるという言語事実を示している。

第5章【感情形容詞に対応する動詞と「～がる」との比較】では、第一部第3章における分析結果に基づき、感情形容詞と同一の語根を持ち、形態的・意味的に対応する動詞（「懐かしい」に対して「懐かしむ」、「うらやましい」に対して「うらやむ」等）と「～がる」との比較を行い、両者の相違点について考察している。ここでは、まず類語辞典等、意味的な分類に基づき語を分類・配列した複数の辞書より、感情に関わる動詞として共通に記載されている71語を抽出した後、それらに対応する感情形容詞があるものとなないものに分類している。先行研究の記述を検討した上で、対応する形容詞がある動詞については、ヲ格補語のみをとるもの、ヲ格補語も二格補語もとる得るものの2つに分け、対応する形容詞がない動詞については、ヲ格補語のみをとるもの、ヲ格補語も二格補語もとる得るもの、および二格補語をとるものの3つに分類している。そして、それらの各補語が表す意味の違いを1つ1つ見ていくこ

とにより、これらの動詞は、対象に対して、主体が当該の感情を抱くこと、あるいは対象となるものによってその感情や心的反応が引き起こされることを表すものであるという点を確認し、まさにこの点において、話者が対象となるものの外的様子をその内面と関係付けて描写する「～がる」とは、その働きが大きく異なることが指摘される。

第6章【「Aがっている」と様態の「Aそうだ」との比較】では、「そうだ」についての先行研究の記述を検討した上で、感情形容詞に様態を表す「そうだ」が接続した「A そうだ」と、感情形容詞に「がる」が接続した「Aがっている」との比較を行い、対象となるものが通常想定されるのとは異なる何らかの言葉、動作・動き、表情・態度などを外的に示していない場合であっても、「Aそうだ」の場合は「～がる」とは異なり、その眼前の様子を問題なく述べることができるという点が確認される。

第7章【「Aがっている」と「Aようだ」「Aらしい」との比較】では、第6章と同様に「ようだ」「らしい」に関する先行研究の記述が検討された上で、これらが感情形容詞に接続した場合と「～がる」との比較が行われている。「Aようだ」は「～がる」とは異なり、対象となるものに何らかの特徴的な言葉、動作・動き、表情・態度などが外的に示されていない場合であっても、観察対象となるものの身体感覚や心理状態について述べることができ、また「Aらしい」は「～がる」とは異なり、対象の外的様子と内面とに食い違いが生じる場合には用いることができないという点が示される。

第8章【日本語教育における「～がる」の指導】では、これまでの日本語教育における「～がる」表現の導入にあたって、「私は悔しい」と「彼は悔しがっている」とが主語の人称の違いとして対比的に示される場合があるという問題点に触れ、「～がる」は単に第三者の感情を表す表現ではなく、対象となるものの外的な様子について、話者がその内面と関係づけて描写するものであるという点を明確に押さえ、「～がる」が用いられる特徴的な意味的・統語的文脈を生かした場面設定および例文提示を行い、「～がる」を導入することが必要であると指摘されている。

【講評】

本論文は、現代日本語の接尾辞「がる」に焦点を定め、各形容詞との接続可能性から、その意味・用法、用いられる特徴的な文脈、他の形式との比較を含め、徹底的な分析・考察を行い、その全体像を包括的に明らかにしようとした意欲的な論文である。従来「がる」は、接尾辞全体の研究の中でその一項目として扱われるか、あるいはいわゆる感情形容詞と属性形容詞との分類を行う際の1つの指標として取り扱われてきており、いずれの場合も「がる」そのものが持つ統語的・意味的特徴についての掘り下げは必ずしも十分には行われていなかったと言える。また、日本語教育においても「がる」のような接辞は小項目としてさほど注目されず、その意味・用法を的確にとらえた上で、それが用いられる特徴的な統語的・意味的文脈を十分に生かした導入がなされてきたとは言えない点が見られる。この意味で本研究は、日本語研究および日本語教育研究の両者にとって非常に興味深い着眼点を持ち、意義のある貢献をなす

ものであると考えられる。また、一見したところさほど大きな問題を取り上げた論文とは見えないかもしれないが、実は1つの形式についてあらゆる側面からの考察を行っていることから、含まれている考察の範囲は非常に広いものであり、その中で論を迷走させることなく一貫して1つのテーマを追い、明快な論文としてまとめ上げた点についても高く評価できる。

本論文の内容について、審査委員より高く評価できる点として挙げられた点は以下の各点である。

- (1) 首尾一貫した問題意識のもと、よく整理された文意の明瞭な文章によって論が進められており、論旨が明快である。論文全体の構成もわかりやすく、主張の明瞭な論文である。
- (2) 看過されがちな小項目とも言える1つの接辞に徹底的に取り組み、その形態的・統語的特徴の解明から、使用される特徴的な文脈を含めた意味・用法の明示的整理に至るまで、粘り強く考察を進め、成果を上げている。
- (3) 「がる」のみならず、形容詞、感情を表す動詞、「ようだ」「らしい」等のモダリティ表現と、関連する先行研究を網羅的に渉猟し、読み込み、適切にまとめ、論を展開している。
- (4) 形容詞について網羅的に緻密な分類を行うとともに、各形容詞と「がる」との接続可能性についても、網羅的に明らかにしている。
- (5) 「がる」の意味を、話者が対象の外面と内面とを総合的な知識に基づいて関係づけて描写するものであると明確に規定し、周辺の用法を含め、各用法を互いに関連付けて示すことに成功している。
- (6) 話者の「とらえ方」に重点を置いた視点は独創的であり、「がる」の意味の一般化として納得できるものとなっている。
- (7) 「～がる」と、第三者の感情について言及する際に用いられる他の表現（感情形容詞に対応する動詞、感情形容詞に接続した「そうだ」「ようだ」「らしい」）との比較はこれまでにない分析であり、それらの形式との相違点を示している。

一方、各委員より、疑問点および不十分な点として指摘された点は、以下のような点である。

- (1) コーパスから用例を収集する手順の説明が必ずしも十分でなく、収集された用例の内訳が示されていなかった。手順について詳細に記述し、収集結果を一覧等で示したほうがよかったのではないかと。用例の偏りなどを見ることにより新たに得られる知見もあったのではないと思われる。
- (2) 「～がる」の周辺の用法の記述には、改善の余地があるのではないかと。話者がとらえる対象の「外的な様子」には、人がある感情・感覚を抱いている際に見せる特徴的な表情や態度、行動等が、通常とは異なり、「現れていない」ことが含まれるという点について明確に押さえておく必要があると思われる。

- (3) 「～がる」が用いられる特徴的な文脈について、統語的な文脈と意味的な文脈は相互に関連しており、分けて記述するよりはより積極的に関連付けて述べたほうがよかったのではないか。純粹に「がる」によってもたらされる統語的文脈の特徴は少なく、多くのものはその意味的文脈を支えるものとなっている。
- (4) 接続可能性や例文の的確性の判断について、母語話者の内省と必ずしも一致しない部分がある。母語話者のインフォーマントの判断を仰いだということであれば、その問い方に改善点があるのではないか。
- (5) 明快な論の展開と表裏一体をなす点とも思われるが、考察の途中でぶつかる興味深い言語事実について、本論文の考察課題とは直接の関連は持たないまでも、何らかの言及を行った上で論を進めていくと、今後の研究の発展のためにより有益だったのではないだろうか。
- (6) 日本語教育における導入の工夫については、具体的な文例を示すとなおよかったと思われる。

【総合的な判断】

以上述べたように、本論文は、これまで見過ごされがちであった現代日本語の接尾辞「がる」に焦点を定め、一貫した問題意識のもと、総合的・包括的な考察を行った意欲的な論文である。多方向から対象となる「がる」に切り込み、新たな光を当ててその本質を描き出していると言える。不十分な点もあるものの、各委員からの指摘は、研究の価値自体を認めた上で、さらに研究を発展させていくために考えておくべき点として述べられたという性質が強い。最終試験においては、論文の不十分と思われるいくつかの点について韓氏本人の考えをたずねた。その中で、韓氏が指摘された点のいくつかについては既に気づいており、今後それらの点を改善しつつ研究を継続し、発展させていきたいと考えていることがわかった。

学位請求論文の内容、最終試験における応答などから総合的に判断した結果、審査委員全員一致で、この研究が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであるという結論に達した。